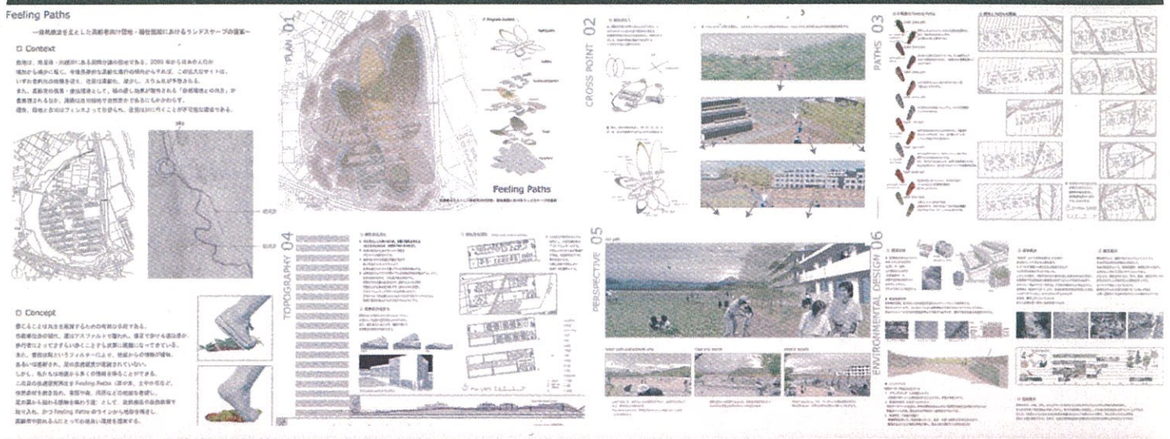
団地再生卒業設計賞 奨励賞

小嶋　咲紀

「Feeling Paths 自然療法を主とした高齢者向け団地。福祉施設におけるﾗﾝﾄﾞｽｹｰﾌﾟの提案」

立命館大学　理工学部・環境システム工学科



縮小社会では住宅地に空き地ができる。それを緑地として利用したいが、では具体的にどう緑化したら良いかというイメージが建築家にも都市計画化にも乏しい。特に当初は田園地帯に浮かぶ人工環境であった郊外団地の多くは、周囲が開発されて高密な市街地になったために、むしろ貴重なオアシス的存在に変わっているところが多い。その意味で、この提案は時代の要請に真っ向から取り組み、ランドスケープデザイナーにしかできない貴重な提案といえよう。提案の内容でも、視覚に偏った建築家の問題設定と違って、触覚を問題にし、それを卓抜なプレゼンテーションで表現しているところも説得力がある。ところで、作者は、現状の問題点として団地と古川がフェンスで仕切られていることを上げている。もし、提案を形態的に特徴づけている彗星軌道のような園路が、古川を超えて既成市街地にまで延びていればもっと魅力的な提案になったことであろう。詳細に描き込まれた建築の平面図の凡庸さともに惜しまれる点である。（大野）

概評
内田 祥哉

今回は、昨年より更に周知がされたようで、応募申し込みも、応募も多かった。
一方様子のわかった、応募者も多くなったようで、提出物の表現が、一様に高まっているし、再生過程の説明を、解り易くする努力が目立ち、ある種のデファクトスタンダードが出来そうなことも感じられる。いづれにせよ、内容にも力作が多く、現実にも一歩近づいた感がある。

第四回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 / 団地再生産業協議会

協賛：東京電力株式会社

団地再生卒業設計賞 内田賞

山崎　勉　（工学院大学　大学院）

団地再生卒業設計賞

谷口　景一朗（東京大学　工学部　建築学科）
桐澤　航　（日本大学　理工学部建築学科）

団地再生卒業設計賞 奨励賞

小嶋　咲紀　（立命館大学　理工学部・環境システム工学科）

応募期間：2006年12月上旬～2007年4月20日（金）
審査委員：審査委員長　内田 祥哉（東京大学名誉教授）
審査委員　大野 秀敏（東京大学大学院　教授）
北山 恒　（横浜国立大学工学部　教授）
西村 紀夫（NPO団地再生研究会副理事長/㈱市浦ハウジング＆プランニング　専務取締役）

応募登録数：26点
応募作品数：21点

団地再生卒業設計賞 内田賞

「団地再生を媒介としたマチの活性化」

山崎　勉
工学院大学　大学院

提案は、豊橋市の戦後の闇市露天商の収容を目的として、都心を流れる牟呂用水の上に開発された１５棟のいわゆる下駄履きアパートの建て替えである。卒論と組み合わせたのだろうか調査も行き届いて好ましい。研究の課程で、この特異な敷地を発見したのだろうか、都市デザイン的にも素晴らしい敷地選定をしている。また、従前の建物の複合用途を継承したところもよかった。それらに加えて、建築のデザイン力が学部卒業設計の水準を遥かに超え、細部もよく練られ、非常に魅力的な建築作品となっている。ただ、都市計画的に攻めた割には、アーバンデザインとしてみると弱点が多い。その一つは、もともと急場しのぎ的に都心の水路を塞いで成立した戦後のプロジェクトに対して批判的視点が欠落していることである。暗渠化された水面の半分でも復活すれば、もっと魅力的な「再生」になったはずである。もう一つは、折角細長い敷地を選んだことで通常の「団地」の閉鎖的な性格を免れ、住棟と既成市街地との接触が豊富なのに、提案は孤立した建築としてしか表現されておらず、提案された建物の多様性を説明しきれていない点である。（大野）

団地再生卒業設計賞

「もりにしずむ」

谷口　景一朗
東京大学 工学部 建築学科

このプロジェクトのなかで評価したいところは、作者が基準線と呼ぶ周辺や敷地内の微地形から計画の原理を造ろうとしていることだ。周辺の細街路を計画地に延伸。敷地内の道路の評価。変化に富んだ等高線の保持。その概念を提出できたことを評価したい。しかしそこまでだ。グラデーションと呼ぶ住棟の配置は説得力をもたない。もし、江戸の都市構造までさかのぼる時間概念を持った基準線を発見できていれば提出された案とは全く違ったものになったかも知れない。作者にはさらに可能な限りの空間的拡がりと、時間的大きさをもって敷地を捉える必要があった。そうすれば本当に「もりにしずむ」回答を発見できたかも知れない。（北山）

団地再生卒業設計賞

「亜団地」

桐澤　航
日本大学　理工学部　建築学科

昭和40年代に建てられた典型的な郊外中層団地の再生は、今年も数例の作品であったが、この作品は、今や貴重な緑の環境資産と なっている外部空間に着目して、その再編を試みている点がユニークである。

既存の中層の住棟間や住棟周辺の緑のオープンスペースを都市と関わるパブリックなものからコモン、プライベートガーデンにヒエラルキーを明確に捉え計画している。

一方、既存住棟に耐震補強フレームを設けプライベートガーデンを持つ住棟部分のユニットや住棟内のアクセスと一体となるコモンガーデン、エントランスガーデンを組み合わせ増築した住棟再生は、構築力も確かであるが、生活感豊かなデザインとなっている。

全体的にまじめできめ細かく、団地再生に取り組んでいる姿勢も評価したい。（西村）